

忘れていた日本に逢える



斎王まつり

第26回

平成20年

6月7日(土)

8日(日)

斎王市 15時～21時

前夜祭 (雨天の場合は総合体育館) 17時～21時

斎王市・アトラクション 10時～15時

禊の儀・斎王群行 (雨天中止) 11時30分～15時 上園芝生ひろば～斎宮歴史博物館

斎宮歴史博物館 斎王他出演者披露

特別ゲスト／三重県立松阪商業高等学校 ギター部

三重県 明和町
誕生50年

配役

齋王
さいおう



曾根 理都子
(伊勢市)

子供齋王
こどもさいおう



福井 あゆみ
(松江小4年生)

女孺
にようじゆ



佐久間 紘
(伊勢市)



森本 紋子
(名古屋市)



池田 真由美
(松阪市)



野北 真弓
(伊勢市)



辻 昌亨
(明和町)

舞人
まいびと

舞人
まいびと



高橋 いづみ
(松阪市)



須崎 恵実
(多気町)



鈴木 智恵
(松阪市)



三浦 彩華
(岡崎市)



趙 炳霞
(中国)

内侍
ないし



前田 沙織
(明和町)

女別当
にょべつどう



瀬田 萌
(明和町)



生山 綾
(東京都)



森本 麻友美
(南伊勢町)



廣野 真智子
(津山市)

舞人
まいびと



張 春艶
(中国)



孫 雪
(中国)



近藤 加奈
(名古屋市)



長岡 孝晃
(伊賀市)



DEVID KERR
(オーストラリア)

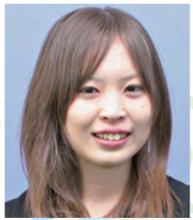
命婦
みよぶ



深田 茜
(明和町)



前山 実乃理
(明和町)



下 智佳
(東京都)



中川 百合恵
(玉城町)



大市 舞
(津市)

風流傘
ふうりゆうがさ



鈴木 直孝
(四日市市)



岡森 義貴
(名張市)



友松 岳士
(名古屋市)



辻 泰
(鈴鹿市)



山本 奈岐穂
(大阪市)

采女
うねめ



大浦 こずえ
(北海道)



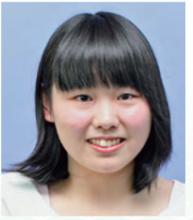
小川 あゆみ
(津市)



中村 朱李
(明和町)



谷 紘子
(明和町)



田川 真由
(明和町)

陪従
ばいじゆう



野口 敦子
(伊勢市)



池畑 いおり
(松阪市)



豊田 浩美
(伊勢市)



山中 松行
(鈴鹿市)



中村 勇夫
(鳥羽市)

女孺
にようじゆ



田川 知香
(明和町)



乾 美菜
(明和町)



中村 千秋
(大阪市)



米倉 由衣
(亀山市)



加茂 由樹子
(伊賀市)



奥田 勲
(四日市市)



田中 明
(津市)

童・童女 出演者 (順不同)



田畑 真湖
松本 育子
山田 奈由



西山 貴穂
岡本 知千
田所 藍耶



福井 麻友
黒坂 卓那
喜多 千晴
奥田 侑姫
村岡 菜摘



山本 菜由
阪井 紋菜
奥田 理央



北山 すみれ
濱口 真美
池田 桃子



西久保 遙香
福井 あゆみ
中川 未悠



前野 智香
松本 梨伽
伊藤 奈美
岸田 悠希



特別ゲスト 三重県立松阪商業高等学校 ギター部

●プロフィール
1974年創部。現在までに681人のOB/OGを輩出。初代顧問の「ギターで学ぶ」という理念を引き継ぎ、ギター・アンサンブルや組織行動を通して、協調性や人間性を育てるクラブ活動を目指しています。昨年度、全国高等学校ギター・マンドリンフェスティバル(7月)で文部科学大臣賞を受賞し、12年連続での最高賞を達成しました。今年度は、同大会での13年連続受賞を目指して練習に励みながら、8月には群馬県と神奈川県、9月には宮崎県での演奏を予定しています。地元地域を中心に、幼稚園や学校、福祉施設などでの招待演奏を積極的に行っており、今年12月14日には松阪市民文化会館にて第31回発表演奏会を開催します。08年4月現在、部員数57人。
公式ウェブサイト <http://www.mie-c.ed.jp/cmatus/cl/gt/>

斎王まつり二十六回を迎える

名誉会長・明和町長 中井幸充

第26回「斎王まつり」が盛大に開催されますこと心からお慶び申し上げます。

斎王まつりは、昭和58年3月に地元婦人会の主催により産声を上げました。翌年にはこのまつりの開催会場でもある国史跡「斎宮跡」の啓発に努めながら、有効な保存と活用を図り、地域の発展に寄与するため、総勢200名からなる王朝絵巻を再現する斎王群行をまつりの中心とするこを目的に実行委員会が結成され、今に至っております。

初めての斎王群行が、昭和60年に実施されて以降、平成4年から前夜祭が、平成6年からは「斎王禊の儀」がそれぞれ開始されました。また、平成7年からは群行出演者を町外からも一般公募することとなり、それに伴い応募者も日本全国に拡大、まつりの見物に訪れる方も増え、県下有数のまつりとして数えられるまでに成長いたしました。

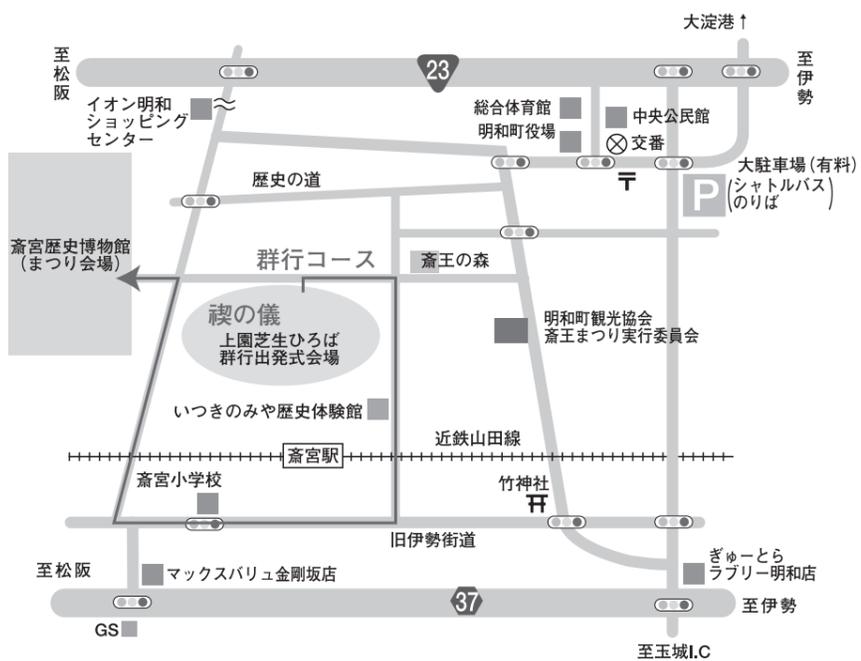
明和町は今年、町制50周年を迎えます。この斎王まつりを皮切りにさまざまな企画をご用意させていただいております。また、来年は「斎宮跡」が国史跡の指定を受けてから30年という節目の年となります。町としても、この国史跡「斎宮跡」を平成25年に執り行われる伊勢神宮式年遷宮に合わせ、大々的にアピールしていきたいと考えております。そしてこの「斎王まつり」とともに、わが町も成長していくことを願います。

最後になりましたが、第26回「斎王まつり」の成功を祈念いたしますとともに、まつり運営にご尽力を賜っております関係者の皆様に対し心から敬意を表します。

6/8(日)	6/7(土)
斎王市 アトラクション 10:00～15:00 斎宮歴史博物館会場 ステージで 各種アトラクション	斎王市 15:00～21:00 前夜祭 雨天の場合明和町総合体育館にて 17:00～21:00 斎宮歴史博物館 斎王他出演者披露 特別ゲスト 三重県立松阪商業高等学校 ギター部
斎王禊の儀 斎王群行 11:30～15:00(雨天中止) 上園芝生ひろば(斎宮駅北)で 斎王禊の儀 上園芝生ひろばから斎宮歴史 博物館まで斎王群行を再現	

もくじ

- 斎王まつり配役…………… 2
- 斎王まつり童・童女出演者…………… 4
- 斎宮の歴史語り(その2)…………… 6
- 斎宮跡の発掘調査…………… 8
- 斎宮女御と源氏物語…………… 10
- 斎王まつり実行委員のページ… 13
- 図書の紹介/実行委員会組織体制… 16
- 斎王まつり実行委員会活動… 17
- 斎宮女御・徽子女王の御歌
(源氏物語千年紀を記念して)… 18
- 群行衣裳…………… 20
- フォトコンテスト/斎王うたあわせ… 22
- 第25回斎王まつりの思い出… 24





齋宮跡第153次調査 三面庇の大型掘立柱建物(東から)



第152次調査でみつかった「四面庇付建物」(奥の森は竹神社に続いています)



平成19年度の齋宮跡の発掘調査

柳原区画の南部で実施しました。調査面積は第一五二次調査の三分の一ほどでしたが、ここでは「柳原区画」だけでなく、これまで齋宮跡の役所のエリアを調査した中で最大の掘立柱建物が見つかりました。この建物も東西五間×南北二間の大型の身舎に南北東の三面の「庇」を持っており、柱の並びで東西一五・二m、南北一mの規模があります。「柳原区画」の中で、中心的な役割を持った建物であった可能性があります。

出土遺物でも、国産の高級陶磁器であった緑釉陶器だけでなく、一〇〜一一世紀にはまだまだ稀少だった中国産の白磁などが目立ちます。

以上のように、昨年度の「柳原区画」の

第一五三次調査

物の大半は、切妻屋根を持つとみられる柱の並びが一重のようですが、四面庇付建物は「身舎」と呼ばれる内側の列の外に、「庇」と呼ぶ、もう一重の柱の並びを持つものです。古代の建物の場合、現代の民家の「庇」のように縁側の上にさしかけるものとは全く異なるものを意味しています。こうした構造は、建物の面積を広げたり、屋根を高くするためのものです。これは、入母屋なしいしは寄棟のより複雑な構造の屋根を持ち、一般の建物より格が高いと考えられます。

齋宮跡「柳原区画」の発掘調査

昭和四五年度に始まった齋宮跡の発掘調査も、今年で三十九年目に入ります。また、平成元年にオープンした齋宮歴史博物館も、開館二〇周年を迎えます。

この長い歴史を持つ齋宮跡の発掘調査によって、「幻の宮」といわれた齋宮跡の解明も大きく進展してきましたが、その中で最も大きな成果は、史跡の東部で平安時代の初め(八世紀末)には成立していたと考えられている「方格地割」の発見でした。幅約一・二mの区画道路で区切られた、一辺およそ二・〇m四方の方形区画が、九世紀の初めまでには東西七列、南北四列分の広がりを持つていたと考えられています。そして現在の竹神社のある一帯の地元の字名を用いて「牛葉東区画」と、その東隣の「鍛冶山西区画」と呼んでいる二つの区画が、平安時代の齋王の居所である「内院」であったと考えられています。この二つの区画は、内側を伊勢神宮の御正殿の周囲にもみられる板垣を彷彿とさせるような大規模な板塀で囲んでおり、その中からは大型の掘立柱建物や、祭祀に饗宴に用いられたとみられる大量の土師器を埋めた穴が数多く見つかり、齋宮跡の中でも傑出したエリアであったことがうかがわれます。

それに対して、この「内院」の北側の方

調査では、齋宮跡の他の役所のエリアの中でも際立った規模や構造の建物が集中しており、この区画が平安時代の齋宮の中でも、いわば高級官庁街といえる場所であった可能性が高くなってきました。

発掘現場の公開と活用

齋宮歴史博物館にとって、史跡齋宮跡とその調査・研究は存在基盤ともいうべきものです。発掘調査は学術的な成果を得るだけでなく、地域や来館者のみなさんが文化遺産の生の姿にふれていただける貴重な機会でもあります。昨年度の第一五二次・一五三次調査では、「発掘現場は展示室」の考えにより、博物館のホームページで詳細に発掘の状況を紹介したり、一六〇人以上の方々に、発掘調査現場の中で、今まさに進行中の発掘を見学いただいたり、体験発掘に参加していただきました。明和町観光ガイドボランティアのみなさんご支援も忘れてはいけません。

博物館では、平成二〇年度も引き続き「柳原区画」を中心に発掘調査を行っていく予定です。次々に見つかる遺構や遺物だけでなく、齋宮跡の発掘調査の今後の展開にもご期待ください。

齋宮歴史博物館
大川勝宏

形区画群は、齋王の生活や儀式などを支えた役人たちのエリアだったと考えられています。齋宮歴史博物館は、その中でも、先の「牛葉東区画」の北側に接する「柳原区画」に着目し、昨年度から平成二一年度までの三カ年の予定で計画的に発掘調査を進めています。「柳原区画」は、内院のすぐ北側にあることや、かつての発掘調査で大型の掘立柱建物の一部が見つかったことなどから、齋宮の役所の部分を統括する「齋宮寮」の長官のための施設がこの周囲にあるのではないかと推定してきました。このように「柳原区画」の発掘調査の成果には大きな期待が寄せられていたのです。

第一五二次調査

「柳原区画」の調査のスタートとして、昨年の七月から二月にかけて第一五二次調査を実施しました。調査面積は二六〇〇㎡あり、齋宮跡の学術調査が始まって以来、最大の発掘調査となりました。「柳原区画」の中央部付近のかなり部分を調査したので、調査の結果、平安時代前期(九世紀)から後期(一一世紀頃)までの長い間にわたって三〇棟以上の掘立柱建物が次々と建てられていたことが分かりました。その中でも最も注目されるのが、写真にも示しました四面庇付建物です。齋宮跡で見つかる建



大雪の中の現地説明会(第153次調査)



子どもたちの発掘体験

斎宮女御と源氏物語

榎村 寛之

一、千年の源氏物語

本年は源氏物語千年紀として、各地でさまざまな催しが行われる。

源氏物語に関わる言葉が、はじめて記録されたのが今からちょうど千年前なのである。その文言は、『紫式部日記』、つまり作者本人の日記に見える。

寛弘五年（一〇〇八）十一月朔日、後一条天皇が誕生して五十日の宴。この時代を代表する知識人として知られる公卿、左衛門督の藤原公任が、紫式部のいるあたりを覗いて、

「あなかしこ、このわたりに、若紫やさぶらふ（すみません、このあたりに、源氏物語の若紫のような美少女はいらっしゃいませんか）」（わが紫）＝私の紫さん、という意味だという説もあるらしい」と呼びかけた。

若紫とは、帖の名であるとともに、後に光源氏の妻となる紫の上の若き日の呼び名である。つまり、公任は若紫の出てくる物語を知っていたことになる。



だった。そして、御息所は、賀茂祭関係の行列を見物する時に、牛車の止め位置を巡って葵の上方と争ってしまう。権勢を誇る左大臣家の前に前皇太子妃は無力であり、プライドを傷つけられた御息所の魂は生霊となり、ついに葵の上を取り殺す。

このような展開の末に、御息所は、新帝、すなわち源氏の兄弟である朱雀帝の斎王となった娘とともに伊勢に下る決意をする。源氏は野宮に斎王とともにいる御息所を訪ねたりして思いとどまるように呼びかけるが、決意は変わらず、ついに伊勢に下るのである。

そして帰京の後、御息所は亡くなり、その娘であった元斎王は、光源氏の秘密の子である冷泉の帝の後宮に入り、斎宮女御と呼ばれるようになる。後の秋好中宮である。

この、斎王と母が共に伊勢に下る、としている所と、元斎王が女御になる、という所が、平安時代に実在した斎宮女御の人生とよく似ている、とされる。

史実の斎宮女御は、醍醐天皇の孫、徽子女王（九二九・八五）という。父は重明親王である。徽子は承平六年（九三六）九月十二日に、わずか七歳（数え年）で朱雀朝の、なんと三人目の斎王に卜定される。

天慶元年（九三八）九月十五日に伊勢に群行した徽子は、八年（九四五）に母の死によりその任が解かれるまで斎宮にあった。しかしこの時期の彼女の動向はよくわからない。

帰京の後、徽子は父である重明親王とともに新天

さらに紫式部は

「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむ」

つまり、光源氏のような人もいらつしやらないのに、紫の上などおられようか、と記している。若紫が「紫の上」と呼ばれるようになったのは、「蓬生」や「薄雲」帖である。

そして、公任が知っていた、ということは、当時の貴族の上層部男性の多くは、この物語の存在を知っていた、ということになるだろう。

これが公式に発表されている源氏千年の由来である。

源氏物語の流布については色々な可能性が考えられるが、紫式部がまずこの物語を書き始め、貴族社会の話題となり、摂政藤原道長の娘、彰子に仕えるようになった、というのが一般的な説である。ならば若紫＝少女時代の紫の上と光源氏を中心とした話は、紫式部の出仕前に作られていた、ということになるだろう。

皇である村上天皇の大嘗祭御禊、つまり代はじめに行う大収穫祭の準備として、天皇自らが賀茂川で行う禊の儀礼を見物している。この時に重明等親王が準備した車は、「庇差・金作各一両、檳榔毛五両、板車二両」だったという。檳榔毛車とは、壁面や屋根に檳榔毛（南国に生えるビロウという植物の葉）を貼り込めた車で、当時の最高級の車である。これを五両も並べて、さらに金で装飾した車を二両用意していたのである。おそらくこれが重明と徽子の車だったろう。重明親王はかなりの派手好きな性格だったので、型破りと見られることを意識した演出だったと思われる。新天皇のお披露目の場で、元斎王である自分の娘を弟に売り込んだのである。

この記事は、『源氏物語』の「行幸」巻を連想する。この行幸は大原野への「野行幸」、つまり鷹狩行幸で大嘗祭ではないが、光源氏は養女である玉鬘に、花婿候補の冷泉帝（実は源氏の子）を見せることを意図して、この行幸を企画したのである。重明親王は古くから源氏のモデルの一人とされており、紫式部に何らかのヒントを与えた可能性は少なくないと思う。

さて、徽子の歌集『斎宮女御集』の最古の歌は、天曆三年（九四九）正月一日に詠まれた。それは村上との後朝、つまり婚儀の翌朝の歌である。こうして斎王だった皇妃、すなわち「斎宮女御」が誕生する。

斎宮女御の人生の始まりは、歌人斎宮女御の始まりでもあった。天曆十年（九五六）年の『斎宮女御

このことに関連して注意したいのは、斎宮と関りの深い六条御息所の物語が、この部分に属しているからである。

二、六条御息所と斎宮女御

六条御息所とは、六条に住む偉い人の奥様、という意味である。正確には皇太子の妻「だった」人として『源氏物語』に登場する。この皇太子は、源氏物語の研究者の間では、源氏の父、桐壺の帝の兄弟だと見られており、その御息所と光源氏は恋愛関係にあった。

しかし、六条御息所が物語に登場する頃、光源氏には、左大臣家の娘である葵の上という本妻がおり、一方で桐壺帝の中宮である藤壺の宮という、許される想いを秘めた人がいた。また、藤壺の姪にあたる若紫をそばに置き、理想の女性に育て上げようとしていた。

つまり六条御息所の立場は、きわめて微妙なもの

徽子女王歌合、天徳四年（九六〇）三月三十日の、いわゆる『天徳歌合』など、村上天皇の時代を彩る宮廷歌合わせの中心には、常に彼女の姿があった。しかし一方で、数多い他の皇妃たちとのあつれき、特に父、重明親王の妻であった藤原登子が、重明の亡き後、村上天皇の寵愛を受けるようになったことは大きなショックだったようで、次第に里第にある日が増え、村上天皇との仲は遠ざかっていく。

康保四年（九六七）年、村上天皇死去。次男の冷泉天皇を経て、安和元（九六九）年、その弟の円融天皇が即位する。ところが天延元年（九七四）に、斎王隆子女王が伊勢斎宮で急死するという事件が起こった。代わって斎王となったのは、徽子と村上天皇の一人娘、規子内親王であった。徽子はこの娘とともに伊勢に再度下る決意をし、円融天皇の制止をも振り切って伊勢に旅立った。かくして彼女の歌人としての活動も斎宮に移ることになる。そして、斎宮で詠まれた多くの歌が『斎宮女御集』に残されることになり、文学のみならず、当時の斎宮の雰囲気を知る上でも貴重な資料となっている。

以上のように、元・斎王が「斎宮女御」と呼ばれるようになることと、娘の斎王とともに伊勢に下ることが『源氏物語』と共通するのである。

六条御息所・秋好中宮と実在の斎宮女御の生涯との関係は、このようなものである。

なお、お断りしておくと、平安時代には社交界というものは存在しない。女性と鬼は、人に見えない

方がいい、などとも言われ、貴族の女性は身分が高くなれば、おろそかには人に会わないもの、とされていた。その時代にこれだけの活動履歴を残した人だから、当時の宮廷社会でも相当な有名人だったと考えていい。つまり出仕する前の紫式部でも、その噂話は色々耳にする機会があったと考えられるのである。六条御息所のエピソードは、源氏執筆のため元ネタ集めのかかなり初期の段階で紫式部の頭の中に入っていたことと思われる。

三、資経本齋宮女御集

さて、齋宮歴史博物館では、本年三月、この『齋宮女御集』の古写本を入手した。『齋宮女御集』は村上天皇や、彼女と交友関係にあった貴族女性たちから送られた歌なども含んでおり、彼女の死後ほどなく、手元に残された遺文をもとに作られたと考えられるが、現存最古の写本は平安時代末期のもの、つまり没後二百年以上たつてからのものでしかない。そしてその頃には、写本は少なくとも四系統に分かれていたようである。それも、各系統で歌の数が異なり、最少百二首、最多二六五首となっている。つまり成立当時の姿がよくわからない本なのである。

常識的に考えれば、物は単純から複雑に展開する。つまり齋宮女御集の場合、百二首本が最も早くに成立した原型に近い本ではないか、という推定が可能なのである。例えば『日本古典文学大辞典』（岩波書

店）などはこの仮説を記している。しかし一方では、もともと歌数の多い本があり、それをセレクトして数の少ない本ができた、という説もある。

ところで百二首本には、古い写本は極めて少ない。鎌倉時代の写本でも極めて希少で、まして成立過程となるとなかなか分からないのである。その意味で今回購入した本は極めて重要な意味を持つ。

というのは、この本は、最古級の写本というだけではなく、藤原定家の子孫の二条家がしかるべき古本から永仁二年（一二九四）に書写したことがほぼ明らかなのである。

藤原定家の子孫は二条・京極・冷泉の三家に分かれ、正系は二条家だった。この本に署名のある藤原資経（そのために資経本齋宮女御集の名がある）は、歌人でも公家でもなく、二条家に関係してこの齋宮女御集を含む『私家集』と呼ばれる写本群を製作する事業の統括のようなことを行っていた人物らしい。

つまりこの写本群は、歌道の家がわざわざ製作したものであったのである。従って、その元本は、鎌倉時代後期には相当重要視された本だったと見なされていたと考えられる。早い話が、日本一の歌の家が「写しが欲しい」と思った程の本だったのである。

しかし二条家は南北朝時代に途絶え、その後資経本は冷泉家に入ったらしい。そのためこの本の価値については未だに分からないことが多い。そのうえ、(財)冷泉家時雨亭文庫には資経本齋宮女御集は、江戸時代の精巧な写本しか残っていなかった。何ら

かの事情で流出したらしいのである。資経本『私家集』は、一冊を欠いた三九冊の形で重要文化財となっている。

今回京セラミタ株式会社様からの寄附により、齋宮歴史博物館の所蔵になったのはこの「資経本齋宮女御集」なのである。すなわち、鎌倉後期に二条家が、大変優秀な本と認定し、写しを作った、その本なのである。

従ってこの本は、その書写時期が古いことだけではなく、不明な点の多いこの歌集の成立過程を考えると上でも重要な本となる可能性が高い。まさに稀少な本だといえる。

それが源氏物語千年紀という日本の古典を見なおすことを目指すメモリアルイヤーに見つかったことは、非常に大きな意味があることなのである。

『資経本齋宮女御集』を初公開する『源氏物語と三重』展は、この齋王まつりまで、齋宮歴史博物館特別展示室で行われている。この機会に是非ごらんいただきたい。

(齋宮歴史博物館 学芸普及課長)



忘れていた日本に逢える

もう一つの齋王（賀茂齋院）

京都の上賀茂・下鴨神社の齋王は両社の御杖代として齋院に住まいされた。両社のうち通称上賀茂神社は賀茂別雷神社とい祭神は玉依姫（神武天皇の母神とは同名異神）から生まれた賀茂別雷神大神を祀り延喜式によると山城の国一宮とされる。

通称下鴨神社は賀茂御祖神社とい親神である玉依姫と賀茂建角身命（異説あり）を祀る。

両神社の齋王制度は、その御杖代として伊勢の齋宮に倣い弘仁元年（八一〇年）嵯峨天皇により第八皇女有智子内親王が遣わされたのが始めとされる。

この制度を伊勢のものを「齋宮」とし、賀茂のものを「齋院」と区別されている。卜定、退下の時期は伊勢と同じ習わしとされたが一六代選子内親王は五代五十七年間勤められた。

齋王が卜定されると参議以上の殿上人を勅使として差し遣わし、両社に事の由を報告せられる。次に御所内の一所を卜して書齋院といわれる居所を設けられ、三年間の日々潔斎し毎月一日には賀茂の大神を遙拝する生活を送られる。

— 齋王まつり実行委員のページ —

三年を経た四月上旬（旧暦）吉日に野宮の院に入られ賀茂川にて御祓を行つた後祭事が許される。

この院は「櫛谷七野神社」（上京区大宮通廬山寺西北社横町）あたりにあったと推定されている。区画は一五〇坪四方で内院と外院とでなり、内院には齋王の神殿と両社の神殿がある。外院には事務等を担当する齋院司や蔵人が置かれ、長官以下官人、内侍、女儒が仕えていた。



上賀茂神社（賀茂別雷神社）



下鴨神社（賀茂御祖神社）

上賀茂・下鴨神社を訪ねて

「伊勢神宮」と「齋宮」はなぜ離れているのか―についての「考察」

持統六年（六九二年）持統天皇伊勢に行幸。
文武二年（六九八年）伊勢齋宮に多耜皇女。
多氣大神宮を度会郡に遷す

そして「文武三年（六九九年）伊勢大神宮に」云々とあります。この文武三年は、その年の十月に斉明天皇の越智山陵と、山科天智天皇山陵が修造された年でもありません。持統太上天皇がやと壬申の乱の整理をつけた年なのです。伊勢神宮の問題も当然彼女が解決したものだと思われれます。式年遷宮も大体このころ始まったといわれていますので、ほぼ現在の体制が出来上がったものと推測できます。

大正二年（七〇二年）持統太上天皇三河、尾張、美濃伊勢、伊賀へ行幸。

どうやらこれらの歴史のうごめきの中で、「伊勢神祠」が「伊勢神宮」へ、そして「伊勢大神宮」へと昇華し、齋宮と伊勢とが離れていったのではないかと考えられます。それにしてもこの行幸は、天智天皇の娘として生まれ、夫天武と共に激動の時代を生きた、人間鷲野讃良の最後のきらめきの時間であったのです。

（川添登氏「伊勢神宮 森と平和の神殿」を参考にしました）

齋王であるが、齋王群行中も、齋宮に住まわれてからも、禊と祈りを繰り返し、神の御杖代となった。

京での御禊は桂川であるが、齋宮では、祓川が知られている。祓川は、齋王群行の際、京都から齋宮へ着かれた際の最後の禊場である。また、史跡の東端を流れるエンマ川は、齋王が伊勢神宮に参向する際、齋宮の東端で禊をしていたということから、禊場の可能性が非常に高い場所である。齋王まつりも禊場会場が大淀だけではなく、禊場再現を再検討してもいいのではないかと考えた。

群行に重要な役割を果たす王朝装束。十二単は、齋王群行には欠かせないものであり、女性の憧れ装束である。誇るべき文化遺産である王朝装束を、たくさんの人々に広げ、世界へ発信したい。それとともに、沿線や街道に残る様々な頓宮跡や関連の碑など大切に確実に、次代へ伝えていきたいものである。

六百六十年という長い間続いた、後世に残る齋王制度。その縁の地に住む者として、誇りを持ち、暮らしていきたいものである。桂川の穏やかな川の流れのなかで、群行の意義さえも、学んだ研修の一日であった。八田明美

大伯解任。

であろうかと考えられます。倭姫命は御神鏡を携えて伊勢国のある場所（伊勢か、齋宮か）に「祠」と「宮」をたてた。そしていつかの時代に、「祠」は「神宮」になり、「磯宮」「齋宮」とは離れてたてられるようになった。

また、天照大神の「祠」とあり、まだ「伊勢神宮」ではありません。おそらく、神様のヨリシロのようなものを立てて神鏡を掛けて天照大神をおまつりし、「磯宮」とよばれた「齋宮」はまさに倭姫命の「宮」＝居館であったわけですね。

はたして伊勢神宮はどのようにして成立したのか。「祠」がいつどのようにして「伊勢大神宮」となっていたのか。そのときは同時に「齋宮」の成立でもあったのです。今のところ結論は出ませんが、考えをまとめればある程度の推察はできます。私は次の歴史の動きの中に、伊勢神宮成立の鍵が潜んでいるのではないかと思います。

- 天智十年（六七一年）天智天皇崩御。
翌年（六七二年）壬申の大乱。
大海人皇子「天照大神」を遥拝する。
天武天皇即位。
天武二年（六七三年）大伯皇女天照太神宮に遷す。
侍さむとして泊瀬齋宮へ。
翌年伊勢へ。
朱鳥元年（六八六年）天武天皇崩御。大津事件。

た、笠縫村でも何かしらおさまりが悪かったのです。そして豊鍬入姫や倭姫命は「天照大神」（神鏡？）を自分の寝所か身近なところにおまつりしていたのだらうと思われれます。つまり、「天照大神」と齋く人＝齋宮＝「齋王」は同所にあつたのでしょうか。その後「是の神風の伊勢の国は、常世の浪の重浪帰する国」「傍国の可怜し国」だから「是の国に居らむと欲ふ」として、倭姫命は其の「祠」を伊勢国に「立」て、「齋宮」を「五十鈴の川上」に「興」てて「磯宮」と謂ったとあります。では「祠」を伊勢国のどこに立てたのでしょうか？そして「齋宮」を「興」てた「五十鈴の川上」「磯宮」とはどこにあつたのか？

このところは非常に重大な問題を含んでいるようです。つまり神祠を伊勢国に「立」て、齋宮を五十鈴の川上に「興」てたのです。伊勢国に五十鈴の川上は含まれていないのではないかとすることもできますが、ではそれが同一の場所ならなぜ「伊勢国五十鈴の川上」と書かなかつたのでしょうか。それは別々のところだったのでしようか。つまりやはり「天照大神」は霊力の強い神様なので「齋王」と離れてお祭りをする必要があつたのかもしれない。また「祠」を立てた場所が「齋宮」を興てた「五十鈴の川上」と同じとすれば、そこは伊勢宇治浦田町か多氣齋宮のどちらから

平成十九年十月二十一日。私達は京にいた。今日は第九回を数えるという野宮神社齋宮群行の研修旅行である。沿道は沢山の人々で賑わっていた。群行が始まると、群行に付き添う法被を着た方々に目に入った。まつりを支える方々である。思わず、ご苦労さまですと声に出した。そして実父の姿と重ね合わせた。父は齋王まつり第一回からの実行委員である。現在二十五回を数えるが、毎年の地道な積み重ねが今日の齋王まつりに繋がっている。西川道子さんらとともに、地域に根ざした町づくり活動を続けてきている。

京の齋王群行見学は、私達のまつりを考える上でも大変参考になり、この日、参加出来なかつた齋王まつりを支えるメンバーとも、野宮神社・齋宮群行を訪れ意見交換・集約し、齋王まつりに反映していきたいと思つた。禊の儀の再現は厳かな雰囲気、舞楽奉納では『蘭陵王』を見学した。緑豊かな自然と桂川の流れ、そして龍笛の音色が、古へと誘ってくれるように思え



野宮神社齋宮群行見学

選挙会



図書館の紹介

私達の「齋宮」について
より多くのことを知っていただくために
「地元」で読める齋宮関係図書のご紹介！

凡例
◎ふるさと会館(図書館)で貸出可 ○ふるさと会館(図書館)で閲覧可
☆いつきのみや歴史体験館・博物館ミュージアムショップで販売
◇齋宮歴史博物館図書ホールで閲覧可

「齋宮」の入門書として	郷土の歴史として「齋宮」を知りたい方に	齋王二行の旅した「群行」の道を歩いてみたい方に	「齋王」を小説で読んでみたい方に	「齋宮」や「齋王」について考えてみたい方に
奥井宏忠著『別れの御櫛―齋の宮と齋宮寮』光書房○◇ 明和町教育委員会編『郷土史に見る齋王』○◇ 三重の文化財と自然を守る会編『伊勢齋王宮の歴史と保存』○◇ 「同Ⅱ」◇	田畑美穂著『齋王のみち―伊勢齋宮の文化史―』中日新聞本社○◇ 村井康彦監修『齋王の道』向陽書房○☆ 内田康夫著『齋王の葬列』角川書店○◇ 池田美由喜著『鶯草―大津皇子とその姉と―』新風舎◇ 郡俊子著『倭姫宮の御巡行』勢陽文芸○◇ 々々『伊勢齋王の恋』近代文芸社○◇ 々々『哀しみの伊勢大来齋王』近代文芸社○◇	津田由伎子著『齋王』学生社○◇ 山中智恵子著『齋宮女御御子女王―歌と生涯―』大和書房○◇ 々々『齋宮志』大和書房○◇ 々々『続齋宮志』砂子屋書房○◇ 々々『齋宮筋記』砂子屋書房○◇ 所京子著『齋王和歌文学の史的探究』国書刊行会○◇ 々々『齋王の歴史と文学』国書刊行会○◇ 榎村寛之著『律令天皇制祭祀の研究』塙書房○◇ 中川 梵著『齋宮和歌の解釈と鑑賞』紫明の会☆ 服藤早苗著『歴史のなかの皇女たち』小学館☆	谷口布有緒文 里中満智子画『齋王ロマン 都わすれの詩』明和町○☆ 中野イツ著『齋宮物語』明和町○☆ 山川修司著『語り部の竹の齋王語り』近代文芸社○☆◇ 榎村寛之著『伊勢齋宮と齋王』塙書房☆	山川修司著『語り部の竹の齋王語り』近代文芸社○☆◇ 榎村寛之著『伊勢齋宮と齋王』塙書房☆

第25回(平成19年度)齋王まつり実行委員会活動

1月	14日(日) 会計監査 21日(日) パンフレット取材研修・懇親会 24日(水) 町長と語る会 28日(日) 総会	2月	1日(木) 総合企画会議 8日(木) 企画・アトラク前夜祭班会議 13日(火) 祓・郡行班会議 14日(水) 童・童女応募締切 15日(木) 会場班会議 18日(日) 着付班会議(着付教室) 21日(水) 出演者応募締め切り・総務班会議 23日(金) 役員会(応募者書類選考) 25日(日) 童・童女出演者説明会(総合体育館)	3月	1日(木) 総合企画会議 4日(日) 着付班(着付教室) 9日(金) アトラク・前夜祭班会議 11日(日) 齋王役選考会・梅まつり同時開催 15日(木) アトラク出演者応募締め切り 16日(金) 企画班会議 23日(金) アトラク・前夜祭班会議 25日(日) 着付班(着付教室) 26日(月) 企画班会議 30日(金) 総合企画会議	4月	5日(木) アトラク出演者会議 7日(土) 着付班(着付教室) 11日(水) 祓・群行・会場班合同会議 13日(金) 企画班会議 14日(土) 大淀地区自治会長会議出席 15日(日) 齋宮地区自治会長会議出席 19日(木) 役員会・下御糸地区自治会長会議出席 22日(日) 明星地区自治会長会議出席 25日(水) 総務班会議・リーフレット役場へお願い 27日(金) 全体会議 29日(日) 倉庫かたづけ	5月	11日(金) 総合企画会議 13日(日) 群行出演者(大人応募者)現場説明 14日(月) 県知事表敬訪問 17日(木) アトラクション出演者最終会議 18日(金) 総合企画会議 20日(日) のぼりたて 童・童女着付教室 23日(水) 着付班(着付教室と役割分担について) 齋王市最終説明会 25日(金) 群行・祓・会場班合同会議 26日(土) 最終全体会議 27日(日) ステージ作り 28日(月) 役場ボランティア説明会	5月	29日(火) 町内自治会長会議出席(まつり協力への御礼) 着付班衣装袋詰め 1日(金) 前夜祭リハーサル 2日(土) 齋王まつり 祓の儀 前夜祭 3日(日) 齋王まつり 齋王群行 4日(月) 着付班 衣装片付け 5日(火) 着付班 衣装片付け 7日(木) 着付班 衣装片付け 10日(日) 倉庫片付け 29日(金) 役員会 12日(木) 本部役員会 20日(金) 本部役員会 フォトコンテスト締切 25日(水) 代表・町長懇談 26日(木) 役員会 31日(火) フォトコンテスト選考会 9日(火) 役場・実行委員会班長懇談会 19日(日) フォトコンテスト・うたあわせ入賞者表彰式(いつきのみや休憩所)	8月	23日(木) 本部役員会 28日(火) 役員会 1日(土) 臨時総会 9日(日) 上園芝生公園下見 10日(月) 松阪市川俣公民館長打ち合せ 11日(火) 齋王市(中学校との打ち合せ) 12日(水) 本部・広報班会議(ポスターについて) 22日(土) 役員懇談会 25日(火) いつきのみや親月会協力 13日(土) 広報班会議(ポスターについて) 18日(木) 本部会議 27日(土) いつきのみや浪漫まつり協力・広報班会議 3日~4日(木) 町文化祭協力 本部会議	9月	8日(木) 総合企画会議・川俣公民館長打ち合せ 16日(金) 古道まつり衣装出し 18日(日) 古道まつり出演協力 19日(月) 衣装片付け 26日(月) 町広報(次年度募集要項掲載について) 打ち合せ 30日(金) 本部会議(次年度役場等について)	10月	2日(日) 松阪市川俣ふるさとまつり出演(齋王他) 7日(金) 本部会議 17日(月) 松阪・伊勢記者クラブ・雑誌社募集要項届ける 19日(水) 本部会議 町内小学校募集要項届ける 21日(金) 町内コミセン他募集要項届ける 26日(水) 本部会議	11月	15日(木) 総合企画会議 16日(金) 古道まつり衣装出し 18日(日) 古道まつり出演協力 19日(月) 衣装片付け 26日(月) 町広報(次年度募集要項掲載について) 打ち合せ 30日(金) 本部会議(次年度役場等について)	12月	2日(日) 松阪市川俣ふるさとまつり出演(齋王他) 7日(金) 本部会議 17日(月) 松阪・伊勢記者クラブ・雑誌社募集要項届ける 19日(水) 本部会議 町内小学校募集要項届ける 21日(金) 町内コミセン他募集要項届ける 26日(水) 本部会議
----	--	----	---	----	---	----	---	----	--	----	---	----	--	----	--	-----	---	-----	--	-----	---

第26回(平成20年度)齋王まつり実行委員会組織体制

役職名	代表 森下 清 実施委員長 笛川 浩 総務財務委員長 田中 貢 企画委員長 岩佐康則 事務局 野畑久子						
本部	久世 晃 浅尾美代子						
会計監事	名誉会長(町長) 中井幸充 西場信行 大野秀郎 瀧上昭憲 森島啓之 中出和之 辻 丈昭 山川充造 吉田いと 中野イツ						
顧問	辻 孝雄 朝倉惟夫 北村純一 橋本久雄 東谷泰明 森島啓之 小林邦久 間宮一彦 山内 理						
相談役	辻 孝雄 朝倉惟夫 北村純一 橋本久雄 東谷泰明 森島啓之 小林邦久 間宮一彦 山内 理						
小委員会名	任務分担の内容	構成する委員の氏名					
総務班	総務の実施 グッズ販売・スタンプラリー等	◎竹内克巳	○土井祐治 中瀬正実	○山路雅敏 原野正之	朝倉惟夫 西岡吉一	石田豊喜 西岡信行	辻 孝雄
財務班	財務の実施	◎西村直克	大西俊次郎				
群行班	祓の儀の実施 出発式の実施 群行の実施	◎早川潤一	○井坂立也 小林順一 山本佐七	○西山浩一 西村 帝 田中真司	石田藤生 八田秀穂 中村利彦	亀村定雄 森島啓之	北山房夫 森島朝美
会場班	着付会場内の管理(写真手配等) 出演者の移動	◎森田 均	○北川和樹 田端幸男	○八田明美	澤 和弘	澤 恒一	潮谷伯子
着付班	着付準備と後片付け	◎西川道子	○新田一子 夏井ちはる 安井澄代 樫本英子	田中政子 西川美代子 植田芳子 青木典子	大山静子 西宮幸代 高柳勝子 橋本伸江	清水清子 服部益子 高橋利香 北川佐代子	新谷千恵子 竹内千祥 今西明美
アトラ前夜祭	アトラクションの実施 前夜祭の実施 社頭の儀の実施	◎中村好富	○伊串金市 小倉斎信 永島せい子 森西捨巳	○北岡 泰 北村哲也 田端利也	○関岡武夫 小林邦久 田端俊也	○中西修一 佐々木久夫 中村幸司	○森菜津子 三田鉄郎 長谷川新
広報班	ポスター・パンフレット原案作成 広報・宣伝事業計画	◎橋本久雄	○藤田ゆかり	奥山憲生	中川裕正	西山清美	

敬称略・順不同(◎は班長 ○は副班長) 平成20年5月1日現在

斎宮女御・徽子女王御歌

源氏物語千年紀を記念して

斎王で源氏物語といえば徽子女王である、斎宮女御と呼ばれ、「葵の巻」六条御息所のモデルとされる。
史跡内にある、斎宮歴史の道「歌碑」の内、母娘で斎宮の地へ来た規子内親王の歌とも紹介する。

世にふれば 又も越えけり 鈴鹿山

昔の今に なるにやあるらむ (徽子女王)

大意

この世に生きていたからこそ、また、鈴鹿の山を越え伊勢へ来ることになった、昔、伊勢へ下った時のことが今重なってゆく。

鈴鹿山 しづのをだまき もろともに

ふるにはまさる ことなかりけり (規子内親王)

大意

鈴鹿山を下って伊勢に向かっていて、昔と今を重ねておられる母上と一緒に出来ることは嬉しいことです。

大淀の 浦立つ波の かへらずば

変らぬ松の 色を見ましや (徽子女王)

大意

大淀の浦に立つ波が寄せては返すように伊勢の地に帰ってこなければ、このように常と変わらぬ松の色を見ることが出来たでしょうか。

折る人も なき山里に 花のみぞ

昔の春を 忘れざりける (徽子女王)

大意

花が咲いてもそれを折って観る人もいない山里に、花だけは昔どおりに春を忘れずきれいに咲いている。

春雨と みるはしぐれか おぼつかな

霞をわけて 散れるもみぢは (徽子女王)

大意

春雨と見えるこの雨は時雨でしょうか怪しいものです、霞をわけて散る紅葉は。



群行衣裳



長奉送使【ちょうぶそうし】



監送使ともいう。齋王一行を伊勢まで送り届ける群行の最高責任者。沿道における警察権が与えられており、任を終えると直ちに帰京しました。

検非違使【けびいし】

平安時代から室町時代にかけて京中の警察を担当した職。元来、平安京の治安維持は京職や衛府の任であったが、特定の官人に京中の警察を担当させることがあり、それが検非違使となり、やがて衛府や京職・弾正台などの権限を吸収し、王朝国家有数の警察機関となったのである。

看督長【かどのおさ】

検非違使庁の下級職員で、身分は火長。弘仁式制では左右それぞれにつき二人と定めら

齋王【さいおう】

天皇の即位ごとに、未婚の内親王（天皇の娘）あるいは女王（天皇の兄弟の娘など）の中から占いで選ばれ、天皇の譲位や崩御、あるいは肉親の不幸などにより解任されて、都に帰る決まりになっていました。伊勢神宮の祭りには、六月・十二月の月次祭と九月の神嘗祭に関わるのみで、ふだんは齋宮の中で都と同様の生活を送っていたものと考えられています。

古代から中世にかけての文学作品に登場する齋王も多く、「源氏物語」「伊勢物語」など、多くの文献に残されています。

十二単【じゅうにひとえ】

十二単とは近世になってからの呼び名で、正しくは女房装束、または裳唐衣といえます。単衣の上に袿を重ね、打衣、表着の上にはベストのような唐衣をはおり、腰には前部のないプリーツスカートのような裳をつけます。貴族の女性の晴の衣裳（正装）です。

髪は垂髪、作り眉。上衣は、上から順に唐衣、表着、打衣、袿、単となっています。唐衣は袿、袷合わせがなく、上からはおりません。表着は上の御衣とも呼ばれる垂領広袖の袷仕立てです。打衣は碇で打って光沢を出したところからこの名があります。形は表衣と同じで紋様はありません。袿は、內衣の意味で、垂領、広袖の袷仕立てで地紋があり、数枚重ねて用います。単は袿と同形ですが、裾、丈ともに長く、単仕立てで裾はひねり仕立てになっています。下衣

13番 日陰の糸 又は玉かずら

1. 垂髪
2. 唐衣
3. 表着
4. 打衣
5. 衣（袿）
（枚数を重ねている）
6. 単
7. 長袴
8. 裳（全体）
9. 裳の小腰
10. 裳の引腰
11. 櫛扇（柏扇）
12. 帖紙
13. 日陰の糸（玉かずら）

※齋王が付けていたかどうかは定かではありません。



には袴と裳をつけます。袴は緋の長袴（若年未婚は濃色）、裳は背にあてて結び、後に長く垂らして引きます。



隨身【ずいしん】

隨身とは、貴族が外出する際に警護にあたった近衛府の官人を指します。それには高い教養と優美な美貌が求められたと云います。

駕輿丁【かちよう】



齋王の乗る輿（葱華輦）を担ぐ人です。

2番 綾

1. 冠
2. 綾
3. 太刀



1
2
3

女孺【にようじゆ】



「めのわらわ」ともいう女官で、一等から三等に分かれており、それぞれに課せられた実務を担当していました。

采女【うねめ】



都では、地方の郡司の娘から選ばれ、天皇の御前などに奉仕していました。しかし、齋宮に采女がいたかどうかについてはよくわかっていません。

童・童女【わらわ・わらわめ】

都の官人が、家族で齋宮に赴任したということも考えられますが、その子供達が齋宮内に住んでいたという可能性はあります。しかし、群行の一員として加わっていたということにはなかつたようです。



内侍または命婦【ないしまたはみょうぶ】



齋宮で働く女官たちの最高責任者として、乳母や女孺の上にいる立場にありました。

女別当【によべつとう】



内侍や官旨が、齋王の住むエリアで公的性質をもつ仕事をこなす女官であるのに対して、乳母のように、齋王のプライベートな「宮家」としての用向きを担当していたのではないかと考えられますが、詳しいことはわかりません。

乳母【めのと】

母親に代わって養育を受け持つ女性で、齋宮には、齋王個人の「家」に仕える存在として、二名ないし三名が務めるようになっていました。

フォトコンテスト 齋宮うたあわせ

齋王賞

「幻想的な」

松阪市 堀田利彦



町長賞



「休息」

松阪市 島 哲司

明和町教育長賞

「齋王のおでまし」

伊勢市 島田てるみ



明和町議会議員賞

「微笑み」

倉敷市 渡辺 浩司



齋宮歴史博物館長賞

「舞い始め」

高砂市 坂元 妙子



特別賞

「いま吹き渡る齋王の微笑み」

岡崎市 三浦 正則



特別賞

「ほほえみ」

伊勢市 島田 良平



特別賞

「煌(きらめき)」

鈴鹿市 加藤 清史



特別賞

「舞う」

松阪市 宮木 舞弓



特別賞

「幽玄」

伊勢市 松田 寿美



第八回現代版「齋宮うたあわせ」

齋王賞

菖子 あやこ 紫の女 むらさきのむすめ たき込めし たきこめ
十二単の じふにたね 歩み香ぐわし あゆみかぐわし
多気町 奥出 久美子

業平賞

鳴りやまぬ なる 田村太鼓に たむら 送くられて おく
齋王群行 いはいぐんぎょう 木立に消ゆる きだて
多気町 遠 明美

明和町長賞

齋王も いはい 賞でし あや 蛭の澤の むし 花喜浦 はなき
紫雲たなびく むらさき ごとしと伝ふ ごとし
明和町 田端 繁雄

歴史博物館長賞

群行の ぐんぎょう 先導務む せんどう 童らの どうら
紅緒の草履 べにおの 大きが愛し おほき
伊勢市 中野 梓

齋王まつり代表賞

群行の ぐんぎょう 齋王みやびに いはい 氏子の前 うぢこ
内侍に街られ うちわい しづしづ進む しづしづ
松阪市 芳賀 昭二

● 本年の募集は中止させていただきます。

応募者 十四名 応募数 二十九名

フォトコンテスト

● 応募方法

- 応募には郵送と齋王まつり事務所受付の2通りがあります。
- 応募作品は応募者本人が撮影したもので1人3点以内、未発表の作品に限ります。
- カラー、白黒作品でサイズは四ツ切のみ
- 応募票の各項目に楷書で記入し、題名、お名前には必ずふりがなをつけてください。
- 応募作品の裏面に応募票を貼付してください。(コピーも可)

● 締切

- 平成20年7月18日(金)消印有効
- 郵送方法について
- 郵送中の事故、破損については責任を負いかねます。

● 選考方法・入賞・入選

- 作品は齋王まつり実行委員会で選考いたします。
- 入賞は、5賞(齋王賞他)、入選20点程度とします。
- 発表は、8月5日前後、新聞紙上にて発表します。

- 入賞・入選作品については、改めてネガをお借りすることがあります。
- パンフレットやポスター、ホームページなどへの使用权は主催者に帰属します。

● 作品の返却

- 応募作品はご返却いたしません。

● 応募先

齋王まつり実行委員会「フォトコンテスト」係

◆ 応募問い合わせ先

〒515-0321
三重県多気郡明和町齋宮2811番地
齋王まつり実行委員会事務局
電話 059615210054
FAX 059615217274



第23代齋王役
安田 有希

齋王役を務めて

心配された朝方の雨も上がり、6月にしては比較的涼しい日に第25回齋王まつりは行われました。私が童女として参加したときにも午前中に雨が降り、まつりの実施が危ぶまれたことがありましたが、その時にも午後には雨が上がり、無事に齋王まつりが開催されました。齋王まつりは古代の齋王様のお祈りに守られているのかもしれませんが、

優雅に葱華輦に揺られながらも緊張いっぱい私を、ご近所の方が温かく声援を送ってくださいって、大変嬉しかったです。

また、齋王まつりが終わってからも地元の方々にお招きいただいたことから、たくさんの方々とお会いすることができましたし、齋王ブログを担当させていただき、さらに多くの方々とお知り合いになることができました。このまつりを通じて多くの方々から私に与えてくださったものは言葉では言い表せられません。

実行委員会を始め、関係者の方々、齋王まつりを見に来てくださった方、ブログを見てくださった方、齋王まつりに関わられた全ての方々に感謝申し上げます。



子供齋王
早川 佳那

子供齋王を務めて

友達と一緒に応募して、私が子供齋王に選ばれた時は驚きました。また私に務まるか不安でいっぱいでした。

当日ずっしり重い衣裳を着て、お化粧をしてもらいたくさんの人の前で緊張しましたが、いろんな人に声をかけられ勇気が出ました。あこがれの葱華輦にも乗ることができ、すごく嬉しかったです。

齋王の気分を少しでもあじわえたことは、私にとって貴重な体験となりました。ありがとうございました。すてきな思い出になりました。



葱華輦復元模型 (齋宮歴史博物館蔵)

忘れていた 日本に逢える

齋王まつり実行委員会 代表 森下 清

齋王制度は、飛鳥時代（六百七十三年）天武天皇が伊勢神宮に「壬申の乱」の戦勝祈願をして勝つことができたことに感謝して、天皇家の御杖代として長女の大来皇女をここ「齋宮」に遣わし、それから約六百六十年間続いた制度でした。都から五泊六日をかけ、齋王一行は「齋宮」まで群行してきたのです。そして、五十数代の齋王やこの地に関わった人々を偲び、「齋王まつり」は始まりました。まつりの群行は、一番華やかだった平安時代の群行を再現したものです。

野花菖蒲が咲く初夏、齋王まつりの季節がやってきます。今年は、私たちの町も誕生五十年を迎えます。

齋王まつりも「忘れていた 日本にあえる」をタイトルに未来に向かう新しい群行の出発にしたいと思います。

全国からたくさんの方々、ふれあえるすばらしいまつりになればと願っています。



主催 ■ 齋王まつり実行委員会

後援◎明和町、明和町教育委員会、国土交通省三重運輸支局、齋宮歴史博物館、(財)国史跡齋宮跡保存協会、(財)民族衣裳文化普及協会、明和町観光協会、近畿日本鉄道株式会社、NHK津放送局、三重テレビ放送(株)、三重エフエム放送(株)、松阪ケーブルテレビ・ステーション(株)
問い合わせ◎齋王まつり実行委員会事務局 TEL 0596-52-0054 FAX 0596-52-7274